

## 一高及び四高教師エミール・ユンケル

上村 直己

### はじめに

日本では独語教師は亡くなると、たとえ生前の功績が大きくても、そのまま忘れられるのが普通である。そして外国人教師の場合はよりその傾向が一層強い。しかし、ドイツ語教育に占める外国人教師の役割は明治・大正期においては現在より大きかったことを考えれば、彼らの生涯と業績はもっと知られよいはずである。今回取り上げるエルンスト・エミール・ユンケル (Ernst Emil Junker, 1864 - 1927) はそうした外国人教師の中でも独語教育の面で特に功績の大きかった一人である。彼は一八八五年 (明治十八) に来日以来一九二七年 (昭和二) に東京で亡くなるまで約四十年間日本に滞在し、その間第四高等学校、第一高等学校、独逸学協会学校等でドイツ語教師として熱心にその職に当たった人であり、また当時の有力な独語雑誌、即ち東京外語系並びに独協系の『独逸語学雑誌』や東大独文系の『独逸語』などに度々寄稿するなど広く日本の独語教育学界のために献身的に尽力した人であった。さらにドイツ東アジア協会 (通称OAG) の維持発展のために尽くした功績も大きい。だがこれまでユンケルについて断片的に語れるだけで纏まった研究は全くなされていない。以下、新資料も取り入れながらユンケルの生涯と独語教師としての活動を中心に述べることにしたい。

## 来日前後

エミール・ユンケルの来日までの経歴等については従来殆ど知られていなかった。例えば武内博編著『来日西洋人名事典』（日外アソシエーツ）においても「一八六四年ドイツのサクソニー地方に生まれた。一八八六年来日して神戸の商會に雇用されたが、……」（同書四六五頁）と書かれているだけである。ところが最近筆者が入手した東京大学教養学部及び金沢大学資料室に保存されている二つの履歴書によって来日前後のことが幾分明らになった。

エルンスト・エミール・ユンケルは一八六四年（元治元年）七月二十七日にザクセン州パウツェン郡のビシヨーフスヴェルダ町の隣村ウィツ（ワイ）ケルスドルフに生まれた。小学校卒業後一八七八年復活祭の時パウツェン市にある師範学校に入学した。六年後そこを卒業し一八六四年に卒業試験を受け、学芸では乙、品行では甲（絶佳）の評点を得たと言っている。また文学とゲルマン学においては在校当時既に独学によって学校が要求する以上の研鑽を積むことに努めたという。パウツェン市の師範学校卒業後、直ぐにシュプレー河畔のオーベルゾーランスというところの助教に聘用された。ところが神戸市のファーベル（Fabel）氏及びフォイクト（Voigt）氏という商人の家庭教師の地位を得た。そして兵庫県視学の尽力によって文部省の許可を受け、明治十八年（一八八五）夏以来、数年間この地位を占めていた。当時は同家の商店の仕事も手伝ったので商業上の知識を得、それが後に神戸市のモルフ商店の輸出部長として活かすことが出来たと語っている。ユンケルがドイツ人商社での家庭教師と輸出部長として過ごした神戸時代は約十二年に及んだことになる。

そして注目すべきはこの最初の神戸時代の一八九六年（明治二十年）十一月二十五日付けでドイツ東亜協会（通称OAG）の会員になっていることである。そして終生その会員であった。だが彼自身は日本研究家ではなかったので、東亜協会の会報（Mitteilungen）に論文を発表することはなかったが後年、司書（Bibliothekar）として役員

(Vorstandsmitglied) を務め協会のために貢献することになる。

## 金沢四高時代

ユンケルは初め神戸のドイツ人商店に雇われたが、商業よりも教育に興味を持って金沢の第四高等学校の独語教師となった。前任者パウル・エーマン (Paul Ehmman) の後任としてであった。ユンケルは四高に勤めたことに關しては前記履歴者(東大教養学部所蔵)において「千八百九十七年拙者ノ希望ニ依リ第四高等学校ノ独逸語教師ニ聘セラレ八年間勤続セリ」と述べている。筆者の手元には北條時敬校長とユンケルとの間で交わされた日英両語で書かれた三種の契約書(いずれも金沢大学資料館所蔵)がある。一つは初めて就職する際に作られたもので明治三十年七月三十一日付があり、他はその後雇用を継続する際に交わされた契約書である。前者にはなぜか明らかな誤記があるので、ここでは後者のひとつを紹介する。

第一方第四高等学校校長北條時敬ト第二方独逸国臣民エミル、ユンケルト取結フ契約左ノ如シ

第一條 エミル、ユンケルヲ第四高等学校教師トシテ明治三十三年八月一日(千九百年八月一日)ヨリ明治三十六

年七月三十一日(千九百三年七月三十一日)マテ三箇年間雇傭ス

第二條 エミル、ユンケルノ給料ハ雇傭期間中全壹箇月金二百五拾円ト定メ毎月末日ニ之ヲ支給ス壹箇月末満ノ日数ニ対シテハ日割ヲ以テ之ヲ支給ス

第三條 エミル、ユンケルハ独逸語ノ授業ヲ担任ス第一方ニ於テ必要ト認ムル時ハ羅甸語ノ授業ヲモ担任ス

第四條 エミル、ユンケルハ第四高等学校ニ諸規則ヲ遵守スルハ勿論授業時間割等總テ第一方ノ指揮ニ従フヘシ

第五條 エミル、ユンケルノ授業時数ハ一週二十四時ヲ超過セシメス

エミル、ウンケルヲ雇傭期間満了ノ後尙引続キ雇傭セントスルトキハ其期間満了六十日前ニ其事ヲ予告スヘシ

#### 第六條

エミル、ウンケルノ雇傭期間中ト雖モ止ムヲ得サル事由アルトキハ第一方ニ於テ此契約ヲ解除スルコトアルヘシ

前項ノ場合ニ於テハ解約ノ翌日より起算シ二箇月分ノ給料ヲ支給ス若シ雇傭期間満了前二箇月未滿ナルトキハ期間満了マテノ給料ヲ支給ス

但第七條及第八條ニ規定スル場合ニ於テハ此限ニ在ラス

#### 第七條

エミル、ウンケルニ於テ契約ヲ希望スルトキハ六十日前ニ第一方ニ之ヲ予告スヘシ

#### 第八條

エミル、ウンケル疾病其他事故ニ依リ休業スルコト二週日ニ及フノ後ハ其休業ノ間第一方ニ於テ給料ヲ半減スルコトアルヘシ若シ休業ノ当初ヨリ二箇月ニ及フモ尙其業ヲ執ルコト能ハサルトキハ第一方ニ於テ此契約ヲ解除スルコトアルヘシ

前項ノ場合ニ於テエミル、ウンケルハ第一方ニ於テ適當ト認ムル者ヲシテ代リテ業ヲ執ラシムルトキハ約束ノ給料ヲ支給ス

#### 第九條

エミル、ウンケルニ宿料トシテ雇傭期間中全壹箇月金拾円ヲ毎月末日ニ支給ス壹箇月未滿ノ日数ニ対シテハ日割ヲ以テ之ヲ支給ス

明治三十三年七月三十日（千九百年七月三十日）記名

第四高等学校長 北條時敬

エミル、ウンケル

此契約第二條ニ記載セルエミル、ウンケルノ給料額ヲ明治三十五年四月一日（千九百二年四月一日）ヨリ

雇傭ノ期間満了則明治三十六年七月三十一日(千九百三年七月三十一日) マテ全一箇月金三百円ニ増加ス  
明治三十五年三月二十八日(千九百二年三月二十八日) 記名

第四高等学校 北條時敬

エミル、ユンケル

これは傭外国人教師が採用される際に校長とかわされるところの通常の契約書である。これは現在も基本的に変わっていない。

一 高で同僚であったブルーノ・ペッツォールド(Bruno Petzold, 1873-1949) による「エンケル先生を悼む」(Nachruf für Herrn Prof. E. Junker) [昭和二年九月号『独逸語学雑誌』]において、「金沢に於ける十年間<sup>(1)</sup>を、彼は生涯のうち最も幸福な時代と云つてゐた。此処で彼は其教職の傍、二人の娘の教育に没頭し、彼の庭園を造り、そして夜には年のいった学生等及び若い同僚等に独逸文学を読んで聞かせてやることが出来た。」と書いている。

四高時代は同僚の草鹿丁卯次郎とは家族ぐるみで親しく交際した。草鹿は加賀生まれの旧東京外語の出身で、法律の勉強のためにドイツに留学し、ドクトル・フィロソフィエの学位を持つ青年学者であったが、この頃は独語を教<sup>(1)</sup>えていた。その息子草鹿龍之介(ハタニ一七七、海軍士官)によると、ユンケルの二人の娘は姉がイレエネ、妹がカーチヤ<sup>(2)</sup>といい、庭には蜜蜂を飼い、また当時珍しいトマトやキャベツ、カリフラワ等の西洋野菜を栽培していたとい<sup>(3)</sup>う。四高時代は西田幾多郎とも交友があったことが西田の日記から分かる。約十五回ほどユンケルの名前が日記に出てくる。例えば「ユンケル氏の妻君来る」(明治三十四年三月二十三日)「夜家内とユンケルを訪ふ」(同四月十二日)

「此夜中目、湯目、余と三人にてユンケル、デハ・ピラント二人を金谷館に招きて晩食をなす」(同六月五日)「午後得能君来る共にユンケルを訪ふ」(同八月九日)「帰途ユンケルを訪ふ」(明治三十六年二月七日)「ユンケル夫婦来訪」(明治三十八年二月二十三日)「ユンケル妻君の欧州行を送る」(同七月二十六日) などである。家族ぐるみの交際だ

ったことが分かる。なお、文中の中目は中目覚、湯目は湯目隆續、得能は得能文である。中目と湯目は共に当時四高独語教師。中目は後年、地理学者に転じた。デハビラントは英語教師<sup>(5)</sup>。

このように平和な暮らしであったが、やがてその生活にも終わりがくる。履歴書によると明治三十八年（一九〇五）六月三十日付で依願解任になっている。その際、在任八年間の功勞に対して一時手当金三百円を授与された。西田の日記によると、ユンケルのために二回送別会が開かれた。すなわち「夜六時より尊甚楼にてユンケル氏の送別の宴を開く 芸者来り踊る」（明治三十八年六月二十日）のほか同月二十四日にも金谷館<sup>(6)</sup>で開かれている。いずれにせよ皆に惜しまれた事が分かる。ユンケルは七月六日に金沢を去って神戸へ向かったが、日記によるとこの時も西田が見送っている。

四高時代の功績に対して同年十二月に日本政府より勲五等旭日章を贈られた。叙勲理由は次の通り。

元第四高等学校備教師（奏任待遇）

勲五等旭日章 独逸国人エミル、ユンケル

右ハ去ル明治三十年八月独逸語教師トシテ傭入以来在職約八年其間生徒ヲ教導スルコト懇篤周到ニ同校生徒ノ独逸語学力上一新紀元ヲ劃シ今日ノ進境アラシメタルカ如キハ同人ノ力与リテ多キモノニ有之候処本年七月解傭帰国到候ニ付此際右功勞ヲ御表彰被遊頭書ノ通叙勲被仰出度旨前文部大臣久保田譲ヨリ申立有之候間該勲章被下賜候様仕度此段謹テ奏ス

明治三十八年十二月十九日

外務大臣伯爵 桂太郎<sup>(7)</sup>

右の文にはユンケルの帰国に際して叙勲を行いたいとあるが、この時期に彼が帰国した形跡はない。履歴書にもそ

のことは書かれていない。後述するように、大正十四年至って初めて四十年振りに帰国した。

### 神戸「ジャパン・クロニクル」時代

八年間の金沢四高の契約が終わると、次いで神戸のJapan Chronicleの支配人になった。クロニクルの創刊者Robert Youngはユンケルの夫人の兄だった関係上、同氏に頼まれて同氏の不在中に新聞社の事務を担当することになったのである。そして神戸到着後、間もなく神戸高等商業学校（後の神戸商大）のドイツ語の授業も担当し、明治四十年（一九〇七）十一月に至った。しかしジャパン・クロニクル時代は一年半で終わった。履歴書（東大蔵）には、

千九百五年神戸市ナル「ジャパン、クロニクル」主筆「ヤング氏ノ囑託ヲ受ケ同氏不在中同新聞社ノ事務ヲ管理スルコト」ナリシカ同地到着後間モナク神戸高等商業学校ノ独語教授ヲモ引受ケ本年十一月下旬ニ至レリとある。だがやがて自分の天分は新聞にないと覺り、再び教育界に復帰し、今度は第一高等學校教師になった。

### 一高及び独協学校教師時代

ユンケル曰く「然ルニ今明治四十年十二月一日ヨリ拙者ノ希望ニ依リ第一高等學校ノ独逸語教師ノ位地ヲ得ルコト、ナレリ」（東大蔵・履歴書）。こうして明治四十年（一九〇七）十二月以後昭和二年（一九一七）に世を去るまで約二十年間その地位にあり、独語教育を通じて多くの優れた人材を養成した。一高では履歴書によると一年ごとに契約を更新（傭繼）している。新渡戸稲造によって指導されていた一高の教師として再び自分の全力を教職に捧げることが出来たのは彼の喜びだった。当時の一高には天下の秀才が蟄集し、切磋琢磨していた。一高での同僚ベッツォールドは、こう言っている。

「騒然たる首都は、彼には色々の点で田園的地方よりも好ましくなかった。けれども夫れだけまた一層活動の機会が与へられてゐた。そしてユンケル氏は燃ゆる様な熱心を以て、彼の新しい仕事に赴いた。学校の傍ら、彼は特に東亜協会の為に尽力した。殊に名譽圖書掛りとして、其位置は彼に彼の腕を振ふべき機会を充分に与へた。」（「ユンケル先生を悼む」）

ベツォールドの言葉通り東京へ出てきたことは結果的にユンケルにとってプラスであつた。独語教師として、また独逸東亜協会の会員として縦横に活躍できるようになつたからである。すなわち、一高以外に独逸学協会学校、拓殖大等でも教鞭をとつた。特に独逸学協会学校へは明治四十一年から大正十三年まで教え、独協の名物教師だつた。独協生徒にとつてもそれは嬉しいことだつたようだ。「ユンケル先生は一高の独逸語を受持つて居られるから、僕等には都合がよい。」（「学校だより・独逸学協会学校」、明治四十三年十二月号『初等独逸語研究』）とある。独協生徒には一高の三部（医科）に進学する者が多かつたのである。

ユンケルは大正三年（一九一四）当時東京麻布区市兵衛町二丁目十二番地に住んでゐた。一高に勤めるようになってドイツ東亜協会（OAG）の会員としても活躍し、特に書記として活躍しその活動は死ぬまで続く。なお、大正四年当時、東京帝国大学文科大学各科共通の語学研究会の講師を青木吉助教授と務め、訳読と会話を分担した。<sup>(8)</sup>

### 雑誌『独逸語』への寄稿

この時期のユンケルの活動としては教場での授業の外に独語学習・研究雑誌への寄稿が挙げられる。大正三年一月東大独文系雑誌として『独逸語』（Die deutsche Sprache）が創刊された。版元は独逸語発行所。顧問にカール・フロレンツを戴き、主筆・青木昌吉（東京帝国大学文科大学助教授）、編集主任・大津康（東京帝国大学文科大学講師・第一高等学校教授）を中心とした充実した内容で光っており、高度の雑誌であつた。ユンケルは常時寄稿者になっている。



その他主な寄稿者には高木敏雄、吹田順助、三浦吉兵衛、上村清延、藤井信吉、雪山俊夫、永井潜らがいた。ユンケル寄稿の記事は次の通り。大抵日独両文で書かれている。

「Korrespondenz」(大3・1)「年賀状」(同上)「Prof. Junkers Bemerkungen」(3・4)「Die Weltwunder der Neuzeit」(3・5)「Junker教授の講評」(同上)「Junker教授の講評」(3・6)「Abschiedsfeiern für Professor Florenz」(3・8)「Junker教授の講評」(同上)「Die Deutsche Schriftsprache」(3・10・11)「Junker教授の訳文及び講評」(3・10)「狂言・狐塚」(4・1・2)「Zur Wortbildung」(4・1・2・4・5)

以下、簡単に内容を紹介する。「Korrespondenz」は雑誌編集部に宛てたもので、雑誌創刊を祝うと共に、語学の勉強には自発性、つまり独学が重要であり、真の教養人は独学者であることを指摘している。そして学習法には暗記が大事だと説いている。「年賀状」(Neujahrswünsche)は、正月はドイツでは日本のように重要な祝日ではないが、新年の祝賀の交換はよく行われるとし、日本学生がドイツ人に年賀状を出す際に注意すべき点を例を挙げてやさしく教えている。「Die Weltwunder der Neuzeit」は古代地中海民族が建てた偉大な七つの建築物に対して、近代が作ったもの(機関車と鉄道、蒸気船、海底電信、巨大橋、大砲、飛行船・飛行機等)を対比している。そして学生がこの文を研究することでマイヤーやブロックハウスなどの百科事典を読むようになればと希望している。「Junker教授の講評」は前号の和文独訳課題の回答についての懇切な講評である。「Abschiedsfeiern für Professor Florenz」は、東京帝国大学文科大学教授カール・フロレンツが帰国するに際して上野の精養軒で開かれた送別会(大正三年七月二日)の様子を伝えたもの。席上の、上田整次(東京帝国大学独逸文学科助教授)、青木昌吉(同上)、山川健次郎(東京帝国大学総長)、上田万年(東京帝国大学文科大学長)、芳賀矢一(東京帝国大学文科大学教授)の役割や卓話、それに対するフロレンツの謝辞など興味ある記事となっている。「Die Deutsche Schriftsprache」は独文だけで書かれている。ドイツ語の文語が歴史的にいかに成立して来たかを述べているが、かなり難解である。「Zur Wortbildung」(言葉の組立)は、詞論や文論の初歩を終えた人は進んでドイツ語内部の構造上の知識を進め、言葉の組立てを

研究することが必要との思いから筆を執ったもの。数回に亘ってドイツ語の語構成を根、根語、幹、前綴、後綴等に分かって懇切に説明している。「狂言・狐塚」はユンケルには珍しい日本文学の翻訳だが、当時『独逸語』には主に大津康によって日本文学（特に近代文学）の対訳がしばしば掲載されていたので、その一環であろう。

### 「独逸語学雑誌」顧問に就任

次いでユンケルは『独逸語学雑誌』(Zeitschrift für Deutsche Sprache) のRatgeber (顧問) に就任し、以後同誌に毎号のように寄稿するようになった。

『独逸語学雑誌』は明治三十一年（一八九六）創刊の当時最も権威あるドイツ語学習・研究誌であった。日独書院発行。同誌は東京外語及び独協系の雑誌で長い歴史を誇り、ドイツ人ではユンケルはエミール・ハリール（東京外語・中央幼年学校教師）の跡を受けて主要な寄稿者であった。同誌は元々、大村仁太郎、山口小太郎、谷口秀太郎が中心となって創刊されたものであったが、谷口は初期の一時期に関わっただけで、後は大村、山口に任せきりで離れていた。しかし大村は明治四十年、山口は大正六年に世を去っていた。加えて第一大戦後、日本ではドイツ語は以前の様な勢いを失って雑誌経営は困難になっていた。そこで雑誌再興のために、谷口が同誌に復帰し、主幹に推された。すなわち主幹・谷口秀太郎（陸軍砲工学校教授）、顧問としてユンケル（第一高等学校教師）、水野繁太郎（上智大学教授）、司馬享太郎（独逸学協会学校教頭）、武内大造（東京外国語学校教授）、田代光雄（同）、辻高衡（同）、が就任した。ユンケルは独逸学協会学校の教師でもあり、谷口は教頭であったので、そうした関係からユンケルが雑誌の顧問に就任するように谷口から要請を受けたものと思われる。

これらの人々は当時の代表的ドイツ語学者であるが、その中で最も多く寄稿したのはユンケルであった。ユンケル

が同誌に発表した記事には次のようなものがあつた。

「学生の外国語自習に関する諸注意」(大九・一)「手紙の書方」(十二・一・二)「慰藉及び悔み状の書方」(十二・三)「手紙の書方」(十二・四)「滑稽門答」(十二・五)「独逸語酒落文句」(十二・六)「続滑稽門答」(同上)「独逸語教授上の二三の逸話」(十二・九)「地震雜感」(十二・十・十一、十三・二)「独逸語の文語」(十三・三・六)「独逸語の酒落」(十三・十)「シルレル鐘の歌」(十三・十一)「サンタクロース」(十三・十二)「米作国加奈陀」(十四・二)「言語の音声模擬」(十四・三・五)「Reisebriefe I-X」(十四・六・十五・八)「Deutsche Ackerbauer in Korea」(十五・七・八)「花屋敷の熊鷹」(十五・十)「噓の迷信」(昭二・六)「海中の黄金」(二・八)。

これらは大抵独日対訳で書かれている。内容的には純粹の語学的記事と論説、ドイツの風俗習慣や日本で起きた事件を扱ったエッセイ、それに旅行記である。概して短いものである。内容のアウトラインを紹介してみよう。

「学生の外国語自習に関する諸注意」(Einige Winke für die Selbsttätigkeit des Schülers beim Studium fremder Sprachen) は、長年のドイツ語教授経験と自己の学習経験から、拙い学習法をしている学生を見て筆を執ったもので、手取り早い語学の習得法というものはなく、額に汗を流して勉強しなければならないことを強調している。そして次の三点が大事だという。①凡そ読むものは少なくとも各句をよく分かる日本語を以て表示し得る程度に徹底的に読まねばならぬ。②正確な言葉をしっかり持っていないければならない。そうでないと朦朧とした意味が分かるだけである。③次になすべきは一定の意義を有する類似語を早く記憶することである。「独逸語教授上の二三の逸話」(Einige Anekdoten aus dem Deutsch-Unterricht) はベルリン大学附属外国人のためのドイツ語学校 (Deutsches Institut für Ausländer an der Universität Berlin) に来る外国人の三つのタイプを紹介している。一つは初め数回は学校に来るがその後は町で遊び、同国人とドイツ語では話さない。そして「ドイツ語は難しい」が口癖になっている。第二のタイプは真面目に学校には来るが、黙っている。だが「語るは銀、沈黙は金」という諺は言語を習得しようとする人に云うことではない。Sprache sprechen から来ているので sprechen すべきだ。第三はインド人で流暢

にドイツ語を話す、聞くと二、三ヵ月前から学んだが、夜も昼も勉強したという話を紹介している。最後にシュリーマンの学習法を紹介し、新聞記事の朗読と、単語を覚える際親類語を一緒に暗記することを薦めている。「地震難感」(Etwas über Erdbeben) は関東大震災に触発されて筆を執ったもので、実際に市中を見てまわり惨状を報告するだけでなく、地層や地殻の変化にも目を向け、考察を加え、さながら地震学者を思わせる。

四回に亘って連載された論説「独逸語の文語」(Die Deutsche Schriftsprache) はドイツ文語の発達のアウトラインを、問題点の指摘しながら述べたかなり難解なものである。同じテーマを前記『独逸語』誌上でも取り上げているが、当時ユンケルの関心の深かったテーマであったようだ。「独逸語の洒落」(Einige Sprachscherze) では、ドイツ語には同音異義語が英語や中国語に較べて少ないが、全然ないというわけではないと、Hans studierte in Leipzig, und machte das Staatsexamen in München und wollte die Doktorwürde in Erlangen erlangen. Auf der Fahrt von Berlin nach Köln stieg ich aus, um in Essen zu essen. など滑稽な文を十七例挙げている。「シルレル鐘の歌」(Zur Einführung in Schillers „Lied von der Glocke“) は鐘を鑄造する動作の描写の間に人間の観察と諸相を包入したシラーの鐘の歌は、ヨーロッパ人に、特に喜びにつけ全生涯のあらゆる厳肅な機会に鐘の響きが付いて廻るドイツ人にとって意味深いとし、その鑑賞の仕方示している。そして最後に、この詩はシラーと同時代の作曲家でヴァイオリニストのアンドレアス・ロンベルクによって作曲されたが、それが最近ドイツ合唱団によって有楽座で上演され、喝采を受けたと記している。「米作国加奈陀」(Kanada als Reisbauland) は最近カナダは米がかなり大規模に収穫されるようになり、将来有望であるが、種類が違うので日本の稲作者は心配する必要はないと述べ、栽培法と精製法を説明している。「言語の音声模擬について」(Über Lautmalerei in der Sprache) は音声の言語史的考察に始まって、ドイツ語の中でいかにそれが用いられてかを検討しているが、少々難解である。「Deutsche Ackerbauer in Korea」(朝鮮に於ける独逸人農夫) は解放後のドイツ人捕虜を中心に経営されている朝鮮の農園の盛んな様子を報告したものである。ユンケルは朝鮮でも独語を教えたことがあったので(後掲「Ostasiatische Rundschau」

誌の追悼記事参照)その時の体験が基になっているようだ。「花屋敷の熊虐」(Grausamkeit gegen ein hilfloses Tier)は浅草の花屋敷動物園で起きた人間による熊虐殺を扱っている。原始林では自然の権利であるのだが、餌をサルに奪われた熊が怒ってサルを襲い殺してしまったのを見て、人間の権利で番人達が寄ってたかって熊を殺した。衆生を哀れみ殊に殺生する勿れと教えている仏教が布かれていたのに、との思いがユンケルにはあったようだ。

十回に亘って連載された「Reisebriefe」(帰独道中記)は、四十年振りにユンケルが大正十四年から翌年にかけて一時帰国した際の途中の滋味豊かな旅行記である。東京から長崎までを扱った第一回の冒頭で次のように述べている。

「欧羅巴」行きの旅が、人間の一世代以上も極東に暮らして、四十年前にやって来た旅を反対の方向に辿った者に、どんな印象を加へるものか、独逸語学雑誌の多数の読者はそれを喜んで見て下さるだろうと予想して、私は時々手紙を以て、私達の経験と觀察を記述しようと思ふ。」(In der Annahme, daß viele Leser der „Z.f.t.d.Spr. gern lesen werden, welchen Eindruck eine Reise nach Europa auf jemanden macht, der über ein Menschenalter im Fernen Osten gelebt und die Reise dahin vor 40 Jahren in umgekehrter Richtung gemacht hat, will ich in gelegentlichen Briefen unsere Erlebnisse und Beobachtungen schildern.)

同年四月三日東京から急行列車で神戸まで行ったが、東京駅では忙しいところ大勢で見送ってくれ、京都と大阪でも旧友達が無事な旅行を祈ってくれた。神戸では数日親戚や友人との別れに追われて過ごした。四十年前の神戸は極東の一小港として概して皆平和な共同生活を営んでいたが、今では素晴らしい建築物や壮大な港湾施設、世界的交通の活発な往来を見るに至った。それに対して長崎の街で目に付くのは昔の外人居留地やその周辺の頹廢であると記している。

以後、香港、シンガポール、バッセーンを経て、スエズ運河を抜け、ポート・サイド市に達したところで、なぜか中断している。同市は四十年前日本に来るとき立ち寄ったところであるが、この間著しく変化したと述べている。最後はアントヴェルペンに向かって出発するところで終わっている。そのために故郷の独逸の様子が書かれていないの

は惜しまれる。なお、第五回（大正十四年十月号）には『独逸語学雑誌』主幹の谷口秀太郎に宛てた次のような書簡が添えられている。これには「ユンケル先生の興味ある道中記は続々到着して居ります。尚ほ左記は本紙主幹に宛てた書信でありますが皆様にも関係がありますので、お言伝て代わりにそのまゝ再録します」と附記がある。

Lieber Herr Taniguchi,

Hiermit ein weiterer Beitrag. Hoffentlich wird es Ihnen nicht zuviel. Sie können ja in einer Fußnote angeben, daß ich mir mit diesen Skizzen viel Briefschreiben an meine Schüler und Freunde ersparen will. Die „Z.f.d.Spr.“ soll damit Erfolg haben, meine Schüler Übung im Deutschen, und ich will mir Zeit und Mühe sparen: 3 Fliegen mit einem Klaps! Sie erhalten von Antwerpen und ev. Hamburg noch einige weitere Briefe über meine ersten Eindrücke von Europa, dann mache ich fürs erste etwas Schluß, werde ich Ihnen aber gelegentlich andere Mitteilungen schicken.

Freundlichen Gruß Ihr

E. Junker.

これによると、ユンケルはアントヴェルペンの次にはハンプルクに向かい、そこからヨーロッパの第一印象を伝える予定であったことが分かる。

「噓の迷信」(Abergläubisches über das Niesen) は古来噓は諸国民の間で様々に解釈されて来たことを興味深く述べている。日本人の噓は無邪気なもので、冗談にその人がよそで噂されていると云われる。欧羅巴で耳鳴りが同じ意味を持っているのと似ている。こつこつ諺がある。噓を一つすれば褒められ、二つすれば憎まれ、三つすれば惚れられ、四つすれば風邪を引く。「海中の黄金」(Der Goldschatz im Meer) はユンケルの遺稿となったものである。

明治元年榎本武揚の指揮する「ミカホ丸」が品川から北海道に向かう途中、犬吠崎沖で嵐に遭い、積んでいた大量の黄金もろとも沈没した。最近になってそれを引き揚げる話が持ち上がり、引き揚げの権利や潜水夫の募集、海中の黄金の価値などを巡って新聞紙上で報じられたのを材料にしている。読者の興味を惹きそうな記事を取り上げ、独訳して語学の勉強に役立てようとしたのであろう。

以上のように当時最も充実した『独逸語』『独逸語学雑誌』の二誌において盛んに活躍したことは彼の大きな功績といつてよい。

### 『袖珍和独辞典』の編纂

大正八年（一九一九）十月、有朋堂よりエミール・ユンケル、権田保之助共編『袖珍和独辞典』（Yuhodos Japanisch = Deutsches Taschenwörterbuch von Y. Gonda unter Beihilfe von E. Junker）が出た。本文八百二十五頁、定価一円五十銭。附録に強変化及び不規則変化動詞表が添えられている。これは同年十一月に同じ版元から出版された三浦吉兵衛・権田保之助共編『袖珍独和辞典』（Yuhodos Deutsch = Japanisches Taschenwörterbuch）と対をなす辞典でえあった。共に携帯の便のためにポケット版になっているが、その割には語彙が豊富な点が高校生を中心に喜ばれたらしく多くの版を重ねた。権田は「序」の冒頭でこう述べている。

「欧州の大戦勃発して、独逸帝国を我が敵国として戦ふことゝなった年の暮、稿を起した本書は、世態人事の目まぐるしい変転の渦の外に超然として、一人の独逸人と一人の日本の学究との間に物静かに其の仕事が続けられて来た。斯くて戦局幾度變遷、終に栄冠が聯合國民の上に加へられて、花の巴里は、今、世界改造の企に忙しい真最中、我々の仕事は始めて終を告げたのである。」

そして権田は語をついで辞書編纂に際しユンケルの功に大なることを力説している。「本書の稿は始め私の手に成

ったのであるが、ユンケル氏は其の原稿の各項に就いて、極めて厳密なる点検を行はれたばかりでなく、種々の注文を提供され、色々の批評を加へられた。其の爲めに我々は必ず毎木曜日を相会して、共同の仕事に日の没するのを忘れたことさへ珍らしくなかつた。而巳ならず印刷に方<sup>あた</sup>つては、ユンケル氏は更らに毎頁煩瑣なる校正をまで引受けられ、校正の嚴重は私<sup>わたくし</sup>かに我々の誇とするまでになつた。斯くの如くにして本書は“unter Beihilfe von E. Junker”と冠しゐるも、実は當に“von E. Junker und Y. Gonda”となすべきものである。我々二人の『共編』となしたるも、決して名のみの夫れに非ざることを諒解して欲しい。」

和独辞典で当時最も評判がよかつたのは明治四十五年に富山房から出た小田切良太郎・ヴォールファルト共編『新訳註解和独辞典』(Neues Japanisch-Deutsches Wörterbuch für Schul- und Handgebrauch von E. Wohlfahrt und R. Odagiri)〈千七百頁〉であり、大正十年当時既に二十版を出していた。それに次いで普及したのがこの『袖珍和独辞典』で、筆者手元のものを見ると大正十二年に二十版が出ている。だが両者を較べると、明らかに前者が優れていた。筆者の手元のものは昭和九年発行で、四十二版を重ねている事実を見てもその優秀性が認められていたことが分かる。現在でも十分通用する内容を持っている。それに対し『袖珍和独辞典』は簡便性と廉価なことで勝っていた位で、その点が特に高校生徒に喜ばれ、一時期持てはやされた。

だがとにかく、ユンケルは前述の如く『独逸語』『独逸語学雑誌』など語学雑誌に多数寄稿したが、図書では共編ではあるがこの和独辞書が唯一であり、一定の役割を果たした。

## 人となり

友人のブルノ・ベッツォールドは前記「ユンケル先生を悼む」の中で次のように述べている。

「エミール・ユンケル氏は心身共に教師であつた。教えること、子弟を指導しつゝ自ら教育家たらしめることは、



彼の心からの要求であった。私が嘗て彼に、若し彼が日本に於ける教職を辞した場合に、何を一番やり度いと思ふかと尋ねた時、彼は然る時はもう一度独逸の故郷で、全然自分の考へ通りに教師として働くのが彼の衷心からの願望であると私に云った。心底から職務に尽瘁してゐる天性の教育家のみが、斯く云ふことが出来る。」

ペッツォールドはこうも述べている。

「彼は少しも休まなかった。彼は自分自身の為の時間を持たなかったが、他人の為には常に持つてゐて、何時も援助を吝まなかった。彼は誰れでも、彼の処へ願ひ事を持って来たものを拒まなかった。また友人が瞑目した時には、ユンケル氏は何時も相談相手として、財産管理人として遺族の力となることを怠らなかった。多くの家庭にとつて、彼は斯やうにして忠実な、世に知られずに善事を行ったエツカルトであった。

かれは人生を、實際的の方面から解釈してゐた。総ての空虚な夢想を嫌つて、彼は直接有益なものが最も重要なものと認めてゐた。毎日毎時、彼に課せられた義務を忠実に果たすことが彼にとって最高のことであつた。従つてまた彼は、他の人々に於ても彼自身に優れてゐた徳を、即ち、<sup>貞</sup>勉、堅実、自主を尊重した。」

生徒たちの思い出を記そう。「ユンケル先生は長年月日本に在留し、独協でも永い間ドイツ語を教えられ、面白い先生だつた。卒業式に述べる答辞の原稿を直して貰うため、先生のお宅、麻布市兵工町に訪れご馳走になったことがある。」（大正四年、磯田仙三郎）「先生の授業は独乙語会話であつた。参考書として独乙から来た教科書を用いてた。黒板に春夏秋冬の画をかけて、いろいろと会話の練習をする。黒板には会話の方法や文法の説明をするため沢山に板書された。先生の熱心に対して時間中生徒には頗る不面目なものがいた。それを先生は、遺憾に思われて屢々涙を浮かべて勉強するように励まされた。一部の生徒は先生の意志に反対の行動をして授業の邪魔をした。（中略）あの善良なユンケル先生をなぜ生徒はいじめたのだらう。先生は温厚で親切な人であつた。私は先生が非常に親切な人であることを知っている。そのころに学校で教科書に使つていた、独乙語の本が独乙から来なくなつて、私はそれを入力できないで困つていたとき、先生は本郷あたりの古本屋から買い求めて、私に持つてきて下さつた。代金はどうし

でも取らないで私に勉強せよといって与えて下さった。こんな親切な先生があらうか。私はほんとうに感激した。

(中略)

先生は麻布に住んでいたので赤坂見附で電車を乗り換えられて一処の電車に乗り合わせることが度々あった。電車の座席にかけて黒い鞆から生徒に出した宿題を取りだして採点されていた。<sup>(10)</sup>」(大正八年、北浜章)

右は独協生の場合であるが、明治四十三年一高文科卒の山田幸三郎の「向陵生活の思出」(Aus meinem Gymnasialenleben)には次のようなエピソードが語られている。「ユンケル教授の会話は学年の始りぞ、<sup>(11)</sup> Gut, Yamada!」などと贅辞を添ふしたが沈黙のすきな予は忽ちにしてその寵を失ってしまった、学年の終りには予の姓名さへも記憶に在るや否や怪しいものであった。「学年末に尾久村で荒川に舟を浮かべて謝恩会を開いた時にユンケル教授が上機嫌で trinken して居られるのと、平素余りに沈黙勝ちな為に同教授に呆れられて居る学友某が無言で沈鬱な顔をして盛に飲んで居るのを見て、何だか対照 (Kontrast) が面白いと予は思った。則ち揶揄一番 „Herr Junker!“ と呼びかけたら一同が少し静まった。予は „Trinken Sie mit Herrn X.“ (X君と共に飲んで下さいとの意味を言ったつもり)。一同は皆笑った。——予が一高在学中の独逸語生活は之を以て大詰めとして終わりを告げた。」

## 教授法

一高での彼の授業はかなり厳しいものであり、授業方法としては暗記を重視した。これは当時学生の間で「ユンケルの法則」(Junkers Gesetz)と呼ばれた。

“Alles Sprechen lernen ist auswendig lernen. Wer schnell eine gute Kenntnis der deutschen Sprache erlangen will, der lerne jeden Tag ein Gedicht oder ein kurzes Prosastück auswendig. Und immer wiederhole das Auswendiggelehrte zum Beispiel in der Electrischen oder auf dem Spaziergang...”<sup>(12)</sup>

このようにすべての語学の勉強は暗記に始まるというのが彼の意見であった。したがって毎時館の初めには誰かが当てられ、前の時間に習った文章の暗誦をやらされた。そして時々「ユンケルの法則」の暗誦もやらされた。だが毎時館のことなのでいつも皆が十分準備が出来ていないことがあった。学生たちはそれでもユンケルの真情のあふれる熱心さには心を打たれていたもので怠けては申し訳ないという気持ちを持っていた。暗記を重んじる教授法は当時も現在も行われていて決して珍しいものではないが、これを「ユンケルの法則」といわれるように徹底して行った点は注目される。理屈では分かっているけれども徹底させるのは根気が要り、長続きしないのが実態だからだ。

前尾繁三郎は「私の履歴書」の中で一高時代のドイツ語教師ぶりについて興味深く回想しているが岩元楨、菅虎雄に続いてユンケルについて次のように語っている。

「それにも劣らず感銘を受けたのは、ドイツ人のドイツ語の教師ユンケル先生であった。ちょうどドイツ第一次大戦後の悪性インフレーションのさ中であつた。われわれがイヒ・カン・ニヒト（私はできません）」と答えると『ドイツの学生は今飢えと寒さと戦いながら勉強しているのに、日本の学生はどうしたことだ』とやかん頭に湯気を立てて憤慨されるのである。しかし、その目には涙さえ浮かべておられる真心には打たれざる得なかつた。<sup>(13)</sup>」

嘉治真三（大正十五年・文乙）の「ユンケル、ベッオルド両先生」（『向陵・一高百年記念』）という文章によると、ユンケルは決して休講がなく、野球やボートの試合があるので休んでくれるように頼んでも決して休講にしまつた。試合にゆくものは欠席になる覚悟で行く他はなかつた。そういうふうにな全員が欠席した時、ユンケルは時間になると誰もいない教室に来て教壇に上がり、出席簿を開いて出欠をつけ、教員室へ戻っていったが、ドイツ人らしい律儀さに感心したという。さらに嘉治によると、ユンケルの黒板のドイツ語が習字の手本のように几帳面できれいな字で、菅虎雄も激賞したこと、英語と独語の類似性を基礎にして教えようとしたが学生の英語力が十分でなく中止になったこと、ユンケルはザクセン出身でいわゆる Hochdeutsch、これに対しベッオルドは Niederdeutsch、学生たちは前者の時間では *es* をデルと発音し、後者ではデアと発音を使い分けしなければならず苦労したことがあったという。

また、ユンケルは声がよく授業でも頼まれると歌ったが、ある時「Traute Heimat」という歌った時は、段々に興奮して最後には目に涙を浮かべて、故国を遠く離れている彼の身の上を思っただけで学生たちは感傷的になったという。

### ○ A G における貢献

彼は熱心な独語教師であっても日本学者ではなかったため、その方面の研究は発表はしなかったが、OAG すなわち「ドイツ東アジア自然・民族学協会 (Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens)」の会員には早く明治二十年になっていた。しかし、地方にいた時はまだ目立った活躍はみられなかった。東京へ移ってから活発となり、Vorstandsmitglied (役員) として長年、司書や副会長を務めるなど、協会の運営面において多大の功績を残し、名誉会員に選ばれた。クルト・マイスナー (Kurt Meisner) は『日本におけるドイツ人』(Deutsche in Japan, 1961) において「ユンケル氏は長年東亜協会の役員を務め、特に価値ある図書室の管理と再編によってOAG のために多大の貢献をなした。」(同書六十六頁) と書いている。思うに、ユンケルの生来の真面目さと几帳面な性格に加え、他人のために働くことを厭わなかったことがそれを可能にしたのであろう。

### 晩年及び死

大正十三年(一九二四)十一月、『独逸語学雑誌』の姉妹誌として日独書院から時文研究雑誌と銘打ち、谷口秀太郎主幹『小独逸新聞』(Kleine Rundschau) が創刊された。時事ドイツ語の専門雑誌としては我が国最初であった。ユンケルは創刊号に祝辞を寄せている。

Lieber Herr Professor Taniguchi !

Zum ersten Erscheinen der „Kleinen Rundschau“ erlaube ich mir dem jungen Unternehmen meine herzlichsten Glückwünsche mit auf den Weg zu geben. Ich hoffe, daß unsere Schüler die hierdurch gebotene weitere Gelegenheit, sich im Verstehen und in dem Gebrauche der deutschen Sprache an zeitgemäßen Lesestoff aus dem Leben der Gegenwart zu üben, immer mehr benutzen werden. Außer dem gewählten Schriftdeutsch der Lesebücher und klassischen Textausgabe ist es auch wichtig, die Sprache des täglichen Verkehrs über die Gegenstände, die gerade im Mittelpunkt des allgemeinen Interesses stehen (ich meine selbstverständlich nicht das ewige und „garstige politische Lied“<sup>1)</sup>), kennen zu lernen. Aber ein flüchtiges Überblicken des gebotenen Stoffes genügt nicht. „Vor den Erfolg haben die Götter den Schweiß gesetzt“ Die hier gegebene Auswahl zeit gemäßen Stoffes soll die Schüler anregen, Ähnliches zu versuchen, zunächst Übersetzungen der Lesestücke in die Muttersprache, hier also die japanische, dann aber auch die Übersetzungen aus japanischen Zeitungen als Mutter zu nehmen, wie man solche Sachen machen will.

Ich rufe „Kleinen Rundschau“ ein fröhliches Glückauf! zu.

E. Junker

ドイツ語読本や古典の抜粋を読むだけでなく、現代生活のドイツ語、時事ドイツ語を読めるようになることも大事なので、こうした雑誌が創刊されたことをユンケルは喜んでゐる。だが初号をざっと見たところ十分でないと率直に述べてゐる。神様は汗して働かなければ成功を与えないという諺まで引用している。そして雑誌を読んで生徒はまず時事的な記事を和訳するが、そのことが逆に日本の新聞を翻訳することに繋がるという。ユンケルはいつもどつした

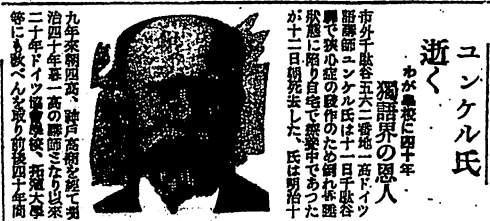
ら生徒がドイツ語をよく学習できるかということを考えていたのである。

だが、ユンケルが期待した『小独逸新聞』は二年続いたのち、大正十五年十二月号を以て廃刊した。

この間大正十四年から翌年にかけてユンケルは四十年振りに帰国し、ドイツの故郷で過ごした。しかし前述のようにドイツでの動静は不明である。ただ、前記の嘉治真三「ユンケル、ベツォルド両先生」の中に次の一節がある。

「私達の二年生の終りに先生が一時帰国されることになった時、クラスの中で先生と一緒に写真をとらうと云い出した人達がいて、先生に申し出ると大変喜んで下さった。その写真を探し出して見ると一九二五年三月五日となって居て、先生がサインをして下さっている。」

帰国後まもなく、ユンケルは昭和二年（一九二七）七月十二日急逝した。前日の午後ユンケルは医師の診察を受けに聖路加病院に赴いた。そして蒲田の私邸に微志で引き籠もっていた『独逸語学雑誌』主幹の谷口秀太郎を見舞った帰途、千駄ヶ谷駅で持病の狭心症で倒れた。そしてそのまま昏睡状態に陥ったが、翌朝自宅で亡くなった。満六十三才であった。七月十三日付の東京朝日新聞には顔写真と共に「ユンケル氏逝く」と題し「わが学校に四十年、独語界の恩人」の副題で次のような記事が載った。（写真参照）



市外千駄谷五六二番地一高ドイツ語講師ユンケル氏は十一日千駄谷駅で狭心症の発作のため倒れ昏睡状態に陥り自宅で療養中であつたが十二日朝死去した。氏は明治十九年來朝四高、神戸高商を経て明治四十年暮一高の講師となり以來二十年ドイツ協会学校、拓殖大学等にも教べんを取り前後四十年間わが国で教へたわがドイツ語界の恩人で、日本の医学博士の卵がドイツ語で論文を書いた場合はほとんど必ず氏に文章の校閲を請ふたものであるといふ。

さらに同じ紙面には妻・カタリーネの名で黒枠の葬儀広告が出ている。

第一高等学校教師エンスト、エミール、ユンケル儀本月十二日午前零時半病死致候に付此段謹告仕候  
追而来る十四日午前十一時麴町区平河町五丁目十八番地独逸東亜細亜協会に於て葬儀相宜可申候

府下千駄ヶ谷五六二

昭和二年七月十二日 妻カタリーナ・ユンケル

また、ユンケルが顧問を務め、度々寄稿した『独逸語学雑誌』の昭和二年八月号掲載の「ユンケル先生の訃」はユンケルの日本のドイツ語教育界に対する功績と温情かつ高潔な人柄を讃え、その死を深く惜しんだ。

茲に読者諸君にお伝えしなくてはならないのは、本誌長年のMitarbeiterであったErnst Emil Junker先生の訃報である。去る七月十一日先生は蒲田の私邸に微恙で引籠られてゐる本誌主幹谷口先生を見舞はれた帰途、千駄ヶ谷で持病の狭心症で卒倒され、其儘昏睡状態に陥られたが、遂に翌朝自宅で逝去せられた。我等同人は、余りに唐突な不幸に呆然として痛嘆の声をのむばかりである。

先生は旧く、明治十九年来朝せられて以来、高等学校、専門学校或は独逸協会中学等に教鞭を執らるる傍ら、本誌の最も忠実なる寄稿者且、Ratgeberである等、其半生を終始我が独逸語界の為に尽瘁せられた。のみならず先生が其私生活に於ても温情且高潔なる人格の持主であった事は主幹の常に感嘆して口にせらるる処であった。読者諸君も定めし本誌上に載せられた先生の趣味豊かな帰独道中記や、折々の流麗平滑な随筆やの記憶尚新たなものがあらう。本誌今後の発展には先生の御援助に俟つ処少くないのに今や先生亡し、嗚呼。

エンケルの死は『英語青年』(研究社)誌上でも報じられた。<sup>(14)</sup>さらに、翌九月号『独逸語学雑誌』には独日両文による前記ベッツォールドの「エンケル先生を悼む」のほかに、「エンケル先生逝去」(Herrn Professor Junkers Tod)が掲載された。エンケルの死は『独逸語学雑誌』にとって大きな痛手であったことを物語っているようだ。内容的には死の前後を中心として述べたもので大体上述のものと同じであるが、参考までに独文の方を引用しておきたい。

## Herrn Professor Junkers Tod

Am 12. Juli, um die Mittelnachtstunde in seinem Hause in Sendagaya Herr Professor Ernst Emil Junker. Der Verstorbene stand im 63. Lebensjahre.

Herr Professor Junker war eine sehr bekannte Persönlichkeit, da er schon 40 Jahre in Japan ansässig war. Seit etwa 20 Jahren war er Lehrer des Deutschen an der Dai Ichi Koto Gakko in Tokyo. Im vorjährigen Jahre verbrachte er einen einjährigen Urlaub in seiner deutschen Heimat. Vor 2 Monaten machten sich empfindliche Störungen seiner Herz Tätigkeit bemerkbar. Herr Professor Junker jedoch betrachtete seinen Zustand als nicht gefährlich und setzte seine Lehrtätigkeit bis zum Beginn der Sommerferien am 7. Juli fort. Inzwischen aber verschlimmerte sich sein Leiden. Am Nachmittage seines Todestages begab sich Herr Junker zu einer ärztlichen Untersuchung ins St. Lukas-Hospital, und auf dem Heimwege er nahe seinem Hause von einem Schläge getroffen, der seinem Leben wenige Stunden später ein Ende machte. Am Donnerstag, den 14. Juli fand im Vereins Hause der Deutsch-Ostasiatischen Gesellschaft eine stimmungsvolle Trauerfeier für den hochgeschätzten Toten statt. Seine sterblichen Überreste wurden am darauffolgenden Montag im Beisein vieler Verwandten und Freunden auf den Kasugano-Friedhof in Kobe bestattet.



一方、『Ostasiatische Rundschau』誌第九号（一九三三）にはユンケルの生涯と功績に視点を置いた追悼記事が載った。伝記的には朝鮮でも独語教師として働いたことがあると記されているのが注意を引く。

Professor Emil Junkert. In Tokio verstarb im Juli d.J. Herr Professor Emil Junker im Alter von 63 Jahren. Seit Ende der 80er Jahre war der Verstorbene in Tokio und Kobe als Lehrer für Deutsch an japanischen Schulen tätig, in gleicher Eigenschaft wirkte er auch längere Zeit in Korea. Durch seine Gattin war er verwandt mit dem Herausgeber des „Japan Chronicle“ eine der wenigen Zeitungen, die sich während des Krieges von der allgemeinen Hetze gegen das Deutschland fern hielten. Ein Menschenalter hindurch hat er in Japan für die Verbreitung deutscher Sprache und Kultur gearbeitet und die Saat, die er gestreut, hat reiche Früchte getragen. Die Wertschätzung, deren er erfreute, fand auch darin ihren Ausdruck, daß die Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, deren langjähriger 2. Vorsitzender er war, ihn zum Ehrenmitglied ernannte. Sein Andenken wird bei Deutschen und Japanern fortleben.

七月十四日独重協会（OAG）の会堂で葬儀がしめやかに執行された。遺骸は数日後、親戚知己に伴われ神戸の春日野墓地に埋葬された。しかし現在この春日野墓地は存在せず、従ってユンケルの墓所も不明である<sup>(15)</sup>。

#### 注

- (1) 草鹿丁卯次郎（一八七〇—一九三三）石川県人。旧東京外国语学校独語科に学び、一九〇七年（明治四十）ドイツ留学、イエーナ及びライプツィヒ大で三年間法律を修めた。一九〇九年イエーナ大学よりドクトル・フィロソフィエの学位を受けた。翌年帰国後、山口高等学校、金沢の四高の独語教授を歴任。のち実業界

に転じ住友倉庫支配人、住友合資会社社長の地位に就いた。独語会話書の編者のほか、日本におけるカール・マルクスの最初の紹介者として知られる。

(2) 草鹿龍之介『一海軍士官の半生記』（光和堂、新訂・増補版、一九八五）十三頁。

(3) 岩波新版『西田幾多郎全集』第十七巻による。

(4) ユンケルの夫人が帰国したのは子供をライプツィヒ音楽院に留学させるためであったようだ。（草鹿

『一海軍士官の半生記』十三頁。）

(5) ハヴィラント (Walter Augustus de Havilland, 1872 - 1968) 英国人教師。ケンブリッジ大学で

神学を学んだ後、明治二十六年来日。三十年から三十七年まで四高教師、英語担当。のち、東京の諸学校で教えた。

(6) 金谷館 明治二十一年建設の金沢市唯一の公的社交場。鹿鳴館を模したものとされた。

(7) 梅溪昇編『明治期外国人叙勲史料集成』第四巻、二百四十六頁。

(8) 大正四年十月号『独逸語』の「独逸語学界消息」

(9) 磯田仙三郎「中学時代の回想」（『独協百年』第一号）四十五頁。

(10) 北浜章「中学時代の想い出」（『独協百年』第二号）七十一・七十二頁。

(11) 大正二年九月号『独逸語学雑誌』

(12) 嘉治真三「ユンケル、ベッオルド両先生」（『向陵・一高百年記念』、昭和四十九年）百九十六頁。

(13) 日本経済新聞社編『私の履歴書』第五十集。百七十二頁。

(14) 『英語青年』第五十七巻十号（昭和二年）。ちなみに、『来日西洋人名辞典』（日外アソシエーツ）の当該項目はこれに依っている。

(15) 春野日墓地は昭和二十六年頃まで外国人墓地として使用されていたが、昭和三十六年に小野浜墓地と

共に現在再度公園にある外国人墓地にすべて移転された。その際の墓地台帳にもエミール・ユンケルの名はないので、彼の墓は埋葬後かなり早い時期（昭和初期）に他に移されたと推定される。

〈附記〉

エミール・ユンケル及び草鹿丁卯次郎の關係資料を入手するに際しては金沢大学資料の田嶋万希子氏にお世話になった。記して謝意を表する。

（元熊本大学）